

1-1

正常新生児の管理

分娩室での 管理

林 時仲

旭川医科大学病院 周産母子センター 講師・副部長, 新生児科長

Point ① 出生児に対し蘇生ができる。

Point ② 出生児の異常を診断できる。

Point ③ 保温, 感染予防, 栄養, 母子関係の確立を遵守した診療ができる。

Point ④ 出生直後の母子関係の始まりを優先できる。

1. 分娩室での管理

研修医の到達目標

分娩に立ち会う際の研修医の到達目標は, ①蘇生ができる, ②出生児の異常の有無を診断できる, ③異常を認めた場合にそれを高次医療機関へ搬送すべきかどうかを判断し, 適切な時期に適切な方法で搬送できる, である (表1)。

新生児の特徴

新生児期は胎内環境から胎外環境へ劇的な変化を遂げる時期である。90%の新生児は胎外環境に適応できるが, 残り10%は呼吸・循環・体温などに異常をきたす。したがって, 新生児期の疾患の大部分は胎外環境への適応障害と捉えることができる。分娩室での管理では, 出生した新生児を胎外環境に適応できるように手伝いながら胎外環境に適応できなかった新生児を拾い上げるという, 蘇生と評価を同時に行うことになる。

新生児養護の4大原則

分娩室での管理をはじめとして新生児を扱う医療者は, 表2に示す**新生児養護の4大原則を遵守しなければならない**。分娩室での管理をこの原則に沿って解説する。

保温

ただちに清拭する

新生児は低い熱産生能に加えて体表面積が大きいことから熱を奪われやすい。低体温は新生児をアシドーシスに向かわせることから極力避ける。出生時の蘇生では, 体表に付着した羊水が気化する際に児の熱を奪うので, **生後ただちに温めたガーゼやタオルで清拭する**。

部屋の温度に気を配る

分娩室や手術室の室温が意外と低い施設がある。室温は26~28℃に保つ。手術室では, 他のスタッフは室温にまで気を回していないことがあるので, 新生児科医が注意を払う。

表1 研修医の目標

1. 蘇生ができる
2. 異常の有無を診断できる
3. 高次医療機関へ搬送できる（搬送の必要性を判断できる）

表2 新生児養護の4大原則

1. 栄養
2. 保温
3. 感染予防
4. 母子関係の確立

表3 母乳栄養・母乳育児の長所・短所

長所	短所
1. 母子相互作用に優れている	1. ビタミンK 欠乏性出血症
2. 感染防御に優れている（分泌型IgA, ラクトフェリンなどの感染防御因子を多く含む）	2. 母乳汚染（ダイオキシン他）
3. 腸内細菌叢を整える	3. 薬剤の母乳への分泌
4. 栄養学的に優れている	4. 母乳性黄疸
5. 中枢神経を発達させる	5. 経母乳感染（ATL*, サイトメガロウイルスなど）
6. 腸の成熟, 消化酵素の分泌を促す	6. ビタミンD 不足
7. 経済性, 簡便性がある	
8. 乳幼児突然死候群のリスクを下げる	
9. 避妊効果, 母親の乳ガン発症率を下げる	
10. 災害時に有用（人工乳や水が不要, 備蓄も不要）	

*ATL：成人T細胞白血病

救急車の車内温にも気を配る

新生児を搬送する際には救急車内の室温にも注意する。保育器に収容していても車内の温度が低ければ保育器の壁が冷やされてしまい、その輻射熱で保育器内の新生児の体温が奪われる。ちょうど氷柱の側にいると涼しくなるのと同じ原理である。NICUの室温が26～28℃に保たれているのには理由がある。

感染予防

新生児は解剖学的にも免疫学的にも感染防御能が低い易感染宿主である。したがって、感染予防が重要となる。新生児の感染予防には2つの方法がある。1つは感染経路を考慮した感染予防であり、もう1つは母親由来正常細菌叢の早期獲得である。

感染経路の遮断

新生児への主な感染経路は医療者の手指を介した水平感染である。したがって、医療者は**手指衛生を徹底しなければならぬ**。分娩時の処置にあたっては、石けんと流水による**1 処置2 手洗い**（新生児を触る前はもちろんのこと、処置後も手指についた病原微生物を周囲に拡散させないために手洗いを行う）と、アルコール擦式消毒を徹底する。また、出生児には母体血が付着しているため手袋を着用する（スタンダードプリコーション）。

母親由来正常細菌叢の早期獲得

皮膚や腸粘膜など、生体が外界と接する部位には正常細菌叢が存在し、病原微生物の生体への侵入を防いでいる。新生

児は母親の胎内では無菌状態にあるが、出生時の産道通過や外界との接触により生後数時間で大量の細菌に汚染される。このとき、ほかの細菌が先に定着してしまうと競合して母親由来の細菌の定着が難しくなるので、真っ先に母親由来の細菌を定着させることが大切である。そのためには**母と子は出生直後から接触を持ち、その後も離さず一緒にいなければならない**。

栄養

母乳栄養が原則である。母乳の栄養学的、免疫学的長所はいうまでもなく、授乳行為により乳汁分泌が促進し、母親は母性行動をとることができるようになる（表3）。母乳育児は母子関係の形成のための最も簡便で確実な行為である。母乳育児を進めるためには“母乳育児成功のための10か条”を実践する（表4）。

母子関係の確立

被虐待児の4割は早産低出生体重児の出身である。その最大の理由は、救命のために母子分離を余儀なくされることにある。わが子と離ればなれにされた母親はわが子に興味を失ってしまうので、ネグレクト（育児遺棄）や虐待に至る。新生児の養護にあたっては極力、**母子分離を避けることが重要である**。母子分離が不可欠な場合は、出生時に赤ちゃんに触れさせる、抱っこしてもらうなど積極的に母子接触を図る。母親の元から新生児を搬送する場合には、児の写真を撮影して残していくだけでも母親の愛着形成を促すことができる。